

# 学生の情報収集, パワーポイント作成, プレゼンテーションスキルの向上を目的とした パワーポイント・ディベートの実践

小山 義徳

千葉大学・教育学部

PowerPoint debates for promoting students' presentation,  
information gathering, and PowerPoint slides design skills

OYAMA Yoshinori

Faculty of Education, Chiba University, Japan

本稿は、筆者が新入生向けにこれまでに行ってきた、「新入生の自己紹介を目的としたパワーポイントの作成」の実践と、「リサーチスキルとプレゼンテーションスキルの向上を目指したディベートの実践」を振り返り、それら2つの実践を組み合わせ、「パワーポイント・ディベート」の授業実践を提案した。

キーワード：パワーポイント (PowerPoint) ディベート (debate) プレゼンテーションスキル (presentation skill)  
リサーチスキル (research skill) 情報収集 (Information gathering)

## 1. はじめに

近年の大学教育において、新入生のうちに特に身に着けてほしい2つのスキルとして、「プレゼンテーションスキル」と「情報収集スキル」がある。この2つスキルは大学4年間において、発表を行う場合やレポートを作成する際に必要となってくるからである。また、学生が卒業し、社会で働くようになってからも、仕事に関連した情報の収集や、新製品や企画のプレゼンテーションの際にも必須のスキルである。

これらのスキルを育成する目的で、筆者は様々な実践を行ってきた。その中でも本稿では2つの実践の紹介を行う。1つ目は、新入生が自己紹介を兼ねて、地元についてパワーポイントのスライドを作成し発表をする実践である。2つ目は、図書館やインターネットで収集した情報を元に行ったディベートの実践である。2つとも、「プレゼンテーションスキル」と「情報収集スキル」の2つのスキルの獲得を目的とした。これまでに行ってきた、それら2つの実践を紹介し、メリット、デメリットを考察した後で、本稿で提案するパワーポイントを用いたディベートについて解説を行う。

## 2. これまでの実践の紹介

### 2.1 パワーポイントによる故郷の紹介

1. 1つ目の実践は、学生のパワーポイント作成スキルの向上と、パワーポイントを用いたプレゼンテーションスキルの獲得を目的とした、「パワポで地元」の実践である。この実践は、まだ大学に入学して間もない新入生同士の自己紹介をするという目的も兼ねている。

この実践は以下のように行った。

1. 高橋・片山 (2014) の本を参考にパワーポイントのスライドの作り方について教員が解説。(1時限時)
  - ・文字はグループ化して量を減らす。
  - ・文章を図で置き換える。
  - ・文字を見やすい大きさに設定する。
2. 学生はパソコンルームで自分の地元について情報収集を行う。(2時限時)
3. 学生は調べた内容を5枚のパワーポイントのスライドに伝わりやすいように工夫してまとめる。(2時限時)
4. 授業時間内で1人5分発表、質疑応答1分の計6分間で、発表会を行う。(3時限時)
5. 全員が発表を終えた後で、誰のスライドが分かりやすかったか、誰のプレゼンテーションにはどのような工夫がされていたかを全体でシェア。(3時限時)

### 2.1.1 学生の感想

1. 他の人の発表を見て、うまい、マネしたいと思った点
2. 自分の発表を振り返って、改善したい点
3. MVP (Most Valuable Presentation) の選出
4. 全体の感想

の4つの点に焦点を当てて感想を書いてもらった。その結果、○○君はクイズ形式にして聞き手を参加させる工夫をしていた、○○さんは図や写真を使い見やすかった、等の記述があった。

### 2.1.2 パワーポイントによる地元紹介実践の振り返り

学生の感想を見ると、「○○さんの地元についてよく知ることができた」、「自分の地元のことを以外に知らな



図1. 学生が作成した地元紹介スライドの例

い自分に気が付いた」, 「伝わりやすいプレゼンテーションのコツがわかった気がする」と、概ね好評であった。

反省点としては、トピックが「地元の紹介」であったため、プレゼンテーションの中身が観光ガイドに載っているような、情報にとどまっていたことである。学生が大学で行う発表を考えると、学術的な内容についての情報収集を行い、発表する経験を学生が持てるように工夫する必要を感じた。

## 2.2 情報収集スキルとプレゼンテーションスキルの向上を目的としたディベートの実践

次の年に筆者が行ったのは、情報収集スキルとプレゼンテーションスキルの向上を目的としたディベートである。この実践は中野（2012）等を参考にして、以下のように行われた。

1. 図書館のガイダンスツアーに参加（1 限時）
2. 学生を 3～4 人から成るグループに分ける（2 限時）
3. ディベートで話し合うトピックを教員が用意する。学生から希望トピックがあれば含める。（2 限時）
4. ディベートトピックを決める（2 限時）
5. 2 グループでペアになり「肯定側」, 「反対側」を決める。（2 限時）
6. 図書館でディベートトピックに関係する資料を収集する。（2 限時）
7. 調べた内容をレポートとして提出（3 限時）
8. 伝わるプレゼンテーションの仕方の解説（3 限時）
9. ディベート本番（3 限時）
10. ディベートに参加する 2 チーム以外は審査員として、どちらのチームが説得力があったかを判断する。（3 限時）

### 2.2.1 「情報収集スキルとプレゼンテーションスキルの向上を目的としたディベートの実践」の振り返り

新入生が、大学図書館で書籍、雑誌、インターネットを駆使して、特定のトピックに関する情報収集を体験してもらうという目的は達成できた。また、「ただ、調べる」

のではなく、「ディベートで自分たちの意見の根拠となる資料を調べる」という、今、行っている行為の目的をはっきりさせたうえで、学生が情報収集に取り組めた点は評価できる。

ディベートのメリットとして、その時にテレビやインターネットで動向が注目されているトピックについて、ディベートをおこなう事で、その後、実際の結果はどうなったかに学生の関心が向くことがあげられる。例えば、「イギリスのEU離脱の是非」がメディアで問われている最中に、このトピックでディベートを行うと、新聞やテレビで報道された実際のイギリスの国民投票の様子等、社会の動きに学生の関心が向く。

情報収集の後に、実際にディベートを行ったディベート自体は盛り上がりを見せたが、スピーチに慣れておらず、持ち時間である 3 分間話すことができない学生が複数いた。この原因の 1 つとしては何も資料を示さないままに、スピーチを行っていることがあげられる。スライド無しでスピーチだけで話すスキルを付ける必要があることは確かだが、大学や企業において、何も資料を示さずに説明を行うという場面は今日ではあまり考えられない。

また、ディベートの実践を行った年は、時間数の関係上、パワーポイントの作り方を伝える時間が取れなかったことが悔やまれた。そこで、上記 2 つの実践の反省を踏まえ、学生に情報収集、パワーポイント作成、プレゼンテーションの 3 つのスキルを効果的につけるための実践ができないか模索した。そして、たどり着いたのがパワーポイントを用いたディベートである。



図2. ディベートの様子

## 3. パワーポイントを用いたディベートの実践

これまでに述べた、「パワーポイントによる地元の紹介」と、「ディベート」の 2 つの実践のメリットを取り入れたのが、本節で提案する、「パワーポイントを用いたディベート」である。この実践を通して、学生は資料の収集の仕方、パワーポイントの作成方法とプレゼンテーションの仕方の 3 つのスキルを学ぶことができる。

### 3.1 トピックの設定と情報収集

パワーポイントを用いたディベートの実践は以下の手順で行う。1時間目でディベートトピックとチームの決定と資料収集を行う。1チームは3～4人が理想である。1チームの人数が4人以上であったり、3人以下であっても責任の分散が起きたり、1人の負担が過度に増えたりすることが起きる。1時間目はトピックを決め、情報収集の仕方について学ぶ。そして、1時間目で調べた内容を2時間目の最初にレポートとして提出するように求める。

### 3.2 レポートの提出とパワーポイントの作成

2時間目は、パワーポイントのスライドの作り方を説明し、1時間目で調べた内容をまとめたレポートを元に、パワーポイントのスライドを作成する。その際に、自分たちのグループの立場を支持する論拠を1つ、各メンバーが担当しスライドを作成する。

例えば、「死刑は廃止すべきである」というテーマで、肯定のチームが、「冤罪で死刑になる可能性があるので、死刑は廃止すべきだ」という主張をするとする。この場合、肯定側のメンバーのうち1人がこのポイントを担当し、この論点を支えるデータを交えて、2枚程度のスライドにまとめる。反対側も同様に自分たちの論拠を説明するスライドを作成する。

### 3.3 ディベート本番

ディベートのルールを学生に伝えたいので、パワーポイントを用いた3分間のプレゼンテーションを行う。また、インターアクティブ性を持たせるために、各プレゼンテーションの後には質疑応答の時間を設ける。

ンテーションの後には質疑応答の時間を設ける。

### 3.4 全体の流れ

#### トピック決定と資料収集（1時間目）

1. ディベートトピックを提示。
2. ディベートトピックを決める。
3. 「肯定側」、「反対側」を決める。
4. 図書館での資料の探し方を伝える。
5. ディベートトピックに関係する資料を収集する。
6. 文献の引用の仕方、出典の明記の仕方を学ぶ。
7. 自分のチームの立場を支持するデータ、論拠をまとめA4の紙1枚のレポートを作成する。

#### パワーポイントの作成（2時間目）

1. 1時間目に調べた内容をまとめたレポートの提出
2. 伝わるパワーポイントの作り方を説明
3. レポートを元にパワーポイントのスライドを作る

#### ディベート本番（3時間目）

1. 肯定側1人目のスライド発表と質疑応答（5分）
2. 反対側1人目のスライド発表と質疑応答（5分）
3. 肯定側2人目のスライド発表と質疑応答（5分）
4. 反対側2人目のスライド発表と質疑応答（5分）
5. 肯定側3人目のスライド発表と質疑応答（5分）
6. 反対側3人目のスライド発表と質疑応答（5分）
7. 肯定側まとめ（3分）
8. 反対側まとめ（3分）
9. 聞き手の挙手による判決と根拠の説明（5分）

パワーポイントを用いたディベートの基本形  
(論題例：死刑制度を廃止すべきである)

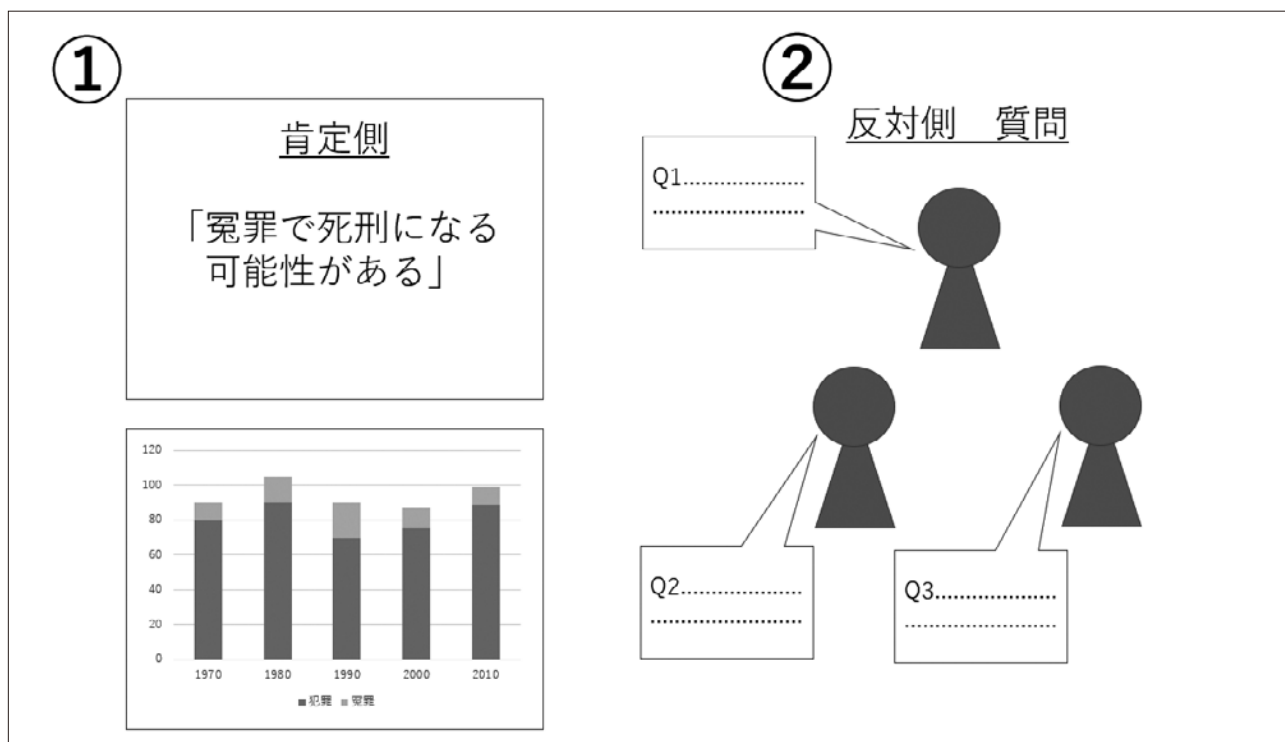


図3. 肯定側のスピーチの基本形と反対側からの質問

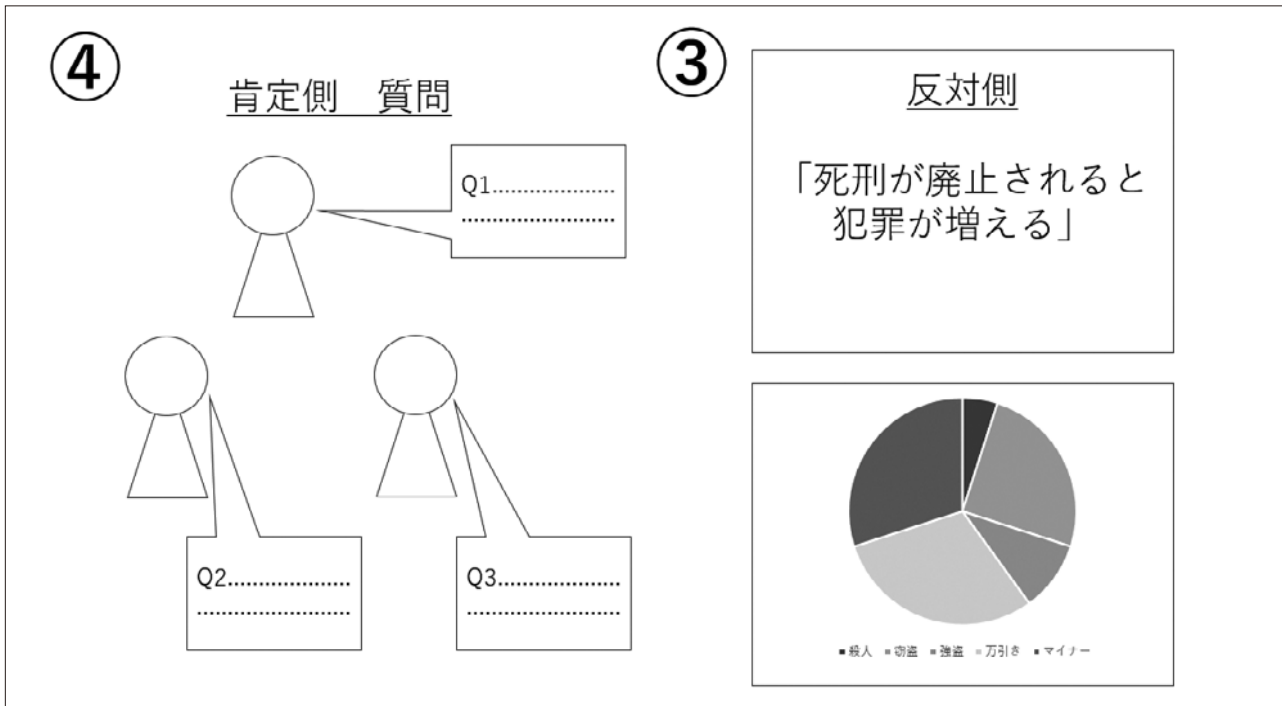


図4. 反対側のスピーチの基本形と肯定側からの質問

聞き手は、ディベートを聞いた後で、「どちらの側の主張がより説得力があったか」に基づき、挙手により判定を行う。この際に、聞き手も自らの判断に関し、根拠を交えてディベーターを納得させる責任を負っていることを伝える。そうすることで、聞き手の側の「聞く態度」を養うことができる。つまり、ディベートは話者だけでなく、聞き手のスキルも伸ばすことができる活動であると言える。

### 3.5 パワーポイント・ディベートのメリット・デメリット

パワーポイントを用いたディベートのメリットとしては、パワーポイントの作成スキルがつく。当たり前のようだが、これは口頭によるディベートでは得られない経験である。また、自分たちの主張を支持するスライドを作成するため、情報収集の必要性が出てくる。

そのために、図書館やインターネットを駆使して情報を集め、必要な情報の取捨選択を行う。そして、それらの情報をまとめたレポートの書き方を教え、ディベートを行う前にレポートを提出することを課している。したがって、レポートを書く力も養われると思われる。さらに、パワーポイントのスライドを用いながらプレゼンテーションを行う方法についても指導するため。プレゼンテーションスキルの獲得も可能である。

この実践が優れている点は、新入生に獲得してほしい、情報集の仕方、レポートの書き方、パワーポイントの作り方、プレゼンテーションの仕方がそれぞれ「何のためにそれをやるか」という目的がはっきりしていることである。

情報収集、レポート作成、スライド作成、プレゼンテーションという各活動は、「ディベートで聞き手を説得する」という共通した目標のために行われ、「なぜ、それを行うか」ということが明確である。

これは、その活動に「真正性（オーセンシティブ）」があることを意味している。そのため、参加する学生の側からしても情報収集や、スライド作成に対する動機づけが高くなるメリットがある。パワーポイントを用いたディベートという活動を通して、情報収集、パワーポイント作成、プレゼンテーションスキルが身に着くだけではなく、グループ活動を行うことでお互いのことを良く知ることができる。

### 引用文献

- 高橋佑磨・片山なつ (2014). 伝わるデザインの基本 技術評論社 東京.  
 中野美香 (2012). 大学生からのプレゼンテーション入門 ナカニシヤ出版 京都.